

取組実績の概要（2 ページ以内）

本事業は、本学のリベラル・アーツ教育が「専門性をもつ教養人」の育成に繋がっているかをトータルに可視化して捉え、本学の教育プログラムの長所・短所を明らかにした上で、長所をさらに伸ばし、短所の不足を改善する施策を実行し、恒常的な教育の改善を図ることを目的としている。そのために、外部のアセスメント・テストや学修行動調査も導入し、その指標と結果を参考にしつつ、本学の教育の効果を測定するための独自の指標を作成・開発し、リベラル・アーツ教育のアセスメント・モデルを構築する。本事業の成果により、本学の教育のさらなる質向上を図るとともに、本学の教養教育による人材育成機能を社会に明確な形で示していく。

学修成果の可視化を進めるための基盤強化

学修成果をより客観的に測定するため、成績評価の平準化、教育目標の明確化、教育課程の体系化を進めた。平成 26 年度から教員に対して自身の成績評価分布を Web 登録時に確認可能とし、平成 27 年度から成績評価ガイドラインの運用を開始した。さらに平成 28 年度には、進級条件科目と卒業研究にルーブリック評価を導入し、平成 30 年度に 1,2 年次対象の必修科目への導入を完了したことにより、すべての学年において学修成果を段階的に評価して、教育の質をより厳格に保証する仕組みを構築した。

また、平成 26 年度より自己点検・評価委員会のもとに、統計・社会調査を専門とする専任教員を含む構成で IR 専門委員会を発足させ、教育改革に資する教学データの収集・調査・分析などの IR 機能を強化した。さらに平成 28 年度には統計分析の専門家である本学専任教員を室長とする IR 推進室を設置し、教学改革を推進する PDCA サイクルの機能を強化している。

アセスメント・モデルの構築による学修成果の可視化

本学のリベラル・アーツ教育が重視する 3 つの領域として①専門知識、②汎用的能力、③態度・志向を設定し、それぞれの領域について直接指標と間接指標（自己報告型、外部評価型）の 3 つの評価方法を設定した。これらに個々の指標を位置付けたものを本学のアセスメント・モデル（図 1）とし、このアセスメント・モデルを学内で実際に機能させるため、各指標の実施や活用に向けた学内各部署での調整、独自指標の開発等を経て具現化を進めた。

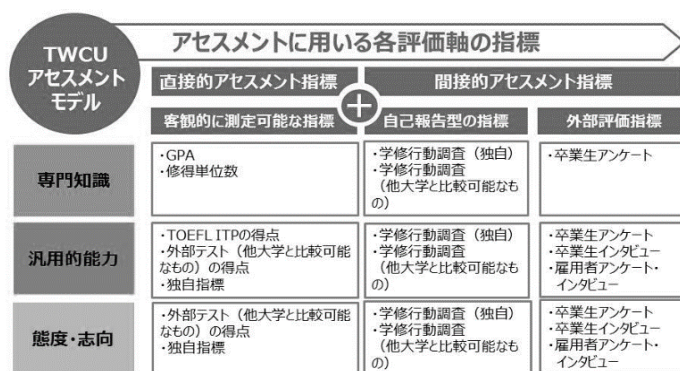


図 1. 東京女子大学アセスメント・モデル

さらに、アセスメント・モデルに基づいて実際に評価を実施するとともに、大学の教育活動との関連付けを明確にするため、本学のディプロマ・ポリシーと各指標を対応させる「アセスメント・プラン」を策定した。指標開発プロジェクト・チームを中心に、複数の指標を結び付けて分析を行うことで、授業外学修時間を伸長させる要因や成績不振の要因、学習目標が教育の満足度に及ぼす影響を検討し、GPA に影響する要因を特定するなどの成果をあげている。これらの知見は、FD・SD 研修で共有することにより、各教員の授業運営や学生指導に役立てられている。

授業外学修時間の伸長

「学生の授業外学修時間数」については、申請時には 9 時間 34 分（1 週間当たり）であった。この数値は、毎年度始めに実施する 2・3・4 年次在学生アンケートの中の「あなたは昨年 1 年間、授業外学習をどのくらいしましたか」という設問に 1 日当たりの時間数を自記式で回答させた結果（1 日当たり 1 時間 22 分）に 7 日をかけて算出したものである。

目標値には達しなかったものの、以下の全学的な取組により、補助期間を通して著しく伸長し、令和元年度の実績値は 19 時間 30 分となった。

- ・シラバスを学生の主体的学びを促すツールとなるよう改善
- ・ルーブリック評価の導入
- ・学生による授業評価アンケートの結果を用いて、「学生を主体的に学修させる工夫」を共通テーマに、全学（各学科・専攻・科目運営委員会等）で FD 検討会を実施
- ・学生参画型 FD の実施
- ・図書館、CALL 学習センター（The Computer Assisted Language Learning Center）、情報処理センター等の学修環境の整備

教育改革への寄与

アセスメント・モデルに基づき、様々な指標を用いた学修成果の把握・分析が進んだことにより、エビデンスに基づいた具体的な分析結果を平成 30 年度の教育課程の改正に活用することができた。具体的には、卒業生アンケートの結果、語学力（特に英語）の重要性を就職後に強く認識した旨の回答が多数あり、在学中の学修の動機付け強化の重要性が明らかとなったこと、自己点検・評価委員会による学修行動調査の結果、本学学生は、他の項目に比べて、リーダーシップをとる力、物事を数値やデータに基づいて実証的に検討する力が身についたかという問いに対し、自己評価がやや低い結果となったことを受けて、以下のとおり教育課程を改正している。

全学共通カリキュラムにおいて、グランドビジョンと共に掲げる「大学として育成する人物像」第2項「国際的な視野をもった地球市民としての女性」に対応して、英語教育の内容・方法、履修年次を見直した他、上級学年での必修単位数を1単位増やした。第5項「21世紀の高度情報化社会に対応できる女性」に対応して、情報処理科目の必修単位数2単位増を行うとともに、文系学生のための数学科目を新設した。第1項「知力（知識）を行動力にするリーディングウーマン」に対応して、体験的・実践的学びの促進、実社会の課題解決に取り組む力を身につける「挑戦する知性科目」を設け、「女性の起業」や「ニューヨーク国連研修」、「PBL キャリア構築講座」等、体験的・実践的学びに重点を置いた科目を一つの科目群にまとめている。学科科目においても、主体的な学びの姿勢を養うため、アクティブ・ラーニングを取り入れた「1年次演習」を前期に置き、全学科・専攻で必修化した。

「挑戦する知性科目」における「女性の起業」、「ニューヨーク国連研修」については、いずれも定員を上回る履修希望者が出ており、学生の関心、ニーズに合った授業科目を提供できていると考えられる。

本事業の全学的な内部質保証体制への融合

補助期間終了後は、アセスメント・モデルの運用実施を中心に据えた体制に移行し、引き続き学修成果の可視化及び向上に努めることのできる体制を整えている。本事業を本学の内部質保証の取組の一部に組み込み、ルーティン化させていくことにより、恒常的な教育改善が可能となった。

【必須指標の達成度】

	平成 26 年度 (起点)	令和元年度	
		目標	実績
退学率 [% (退学者 (除籍者を含む) / 在籍者数)]	0.9% (34/3903)	0.6% (22/3900)	1.1% (47/4095)
プレースメントテストの実施率 [% (テスト実施者/入学者数)]	98.1% (882/899)	99.0%	99.6% (899/903)
授業満足度アンケートを実施している学生の割合*1 [% (実施学生数/在籍者数)]	94.6%	90.0%	94.5%
授業満足度アンケートにおける授業満足率*2 [%]	91.0%	90.0%	93.3%
学修行動調査の実施率*3 [% (実施学生数/在籍者数)]	82.2% (2469/3003)	80.0%	84.9% (2703/3184)
学修到達度調査の実施率*4 [% (実施学生数/在籍者数)]	85.3% (2540/2978)	80.0%	86.6% (2741/3166)
学生の授業外学修時間*5 [時間数 (1週間当たり (時間))]	9時間20分	24.0時間	19時間30分
学生の主な就職先への調査 [実施の有無]	無	無	無

*1 本学では、全学生を対象に「学生による授業評価」アンケートを実施しているが、授業科目毎の実施であるため、数字は、このアンケートの実施授業の割合である。

*2 *1 の「学生による授業評価」アンケートの有効回答数に対する割合。

*3 本学独自の項目設定による4月実施の2・3・4年次対象アンケートに基づき算出。

*4 本学独自の項目設定により学生の自己評価による到達度を測る、4月実施の2・3年次対象アンケート及び12月～1月実施の4年次対象アンケートの数値を基に算出。

*5 4月実施の2・3・4年次対象アンケートにおける、前年度についての数値を基に算出。

(平成 27 年度より、同年度 12 月～1 月実施の 4 年次対象アンケートにおける、同年度についての数値も含め算出)